

# ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討

A Re-examination of Han-style Tombs in Vietnam through the Olov Janse Collection (1938-1940)

宮本一夫・俵 寛司

- ① 調査の経過と目的
- ② 漢墓出土陶器
- ③ 陶器の型式学的検討と年代観
- ④ 漢墓出土銅銭
- ⑤ 漢墓出土銅器・鉄器
- ⑥ 漢墓の墓室構造の変遷
- ⑦ まとめ

## 【論文要旨】

ベトナム漢墓ヤンセ第3次調査による墓葬単位の一括遺物の比較から、灰釉壺と灰陶甕を中心に型式学的な変遷を捉え、フーコック、マントン1A・1B号墓、ゴックアム1号墓、ビムソン2号墓、ビムソン3号墓、ビムソン7号墓、ビムソン10号墓といった変遷を想定した。さらに建和三年(AD149年)銘灰釉壺、嘉平年(AD172~178年)紀年銘磚墓出土灰釉壺、広州漢墓5080号墓副葬陶器との型式学的な比較から、これらの漢墓が2世紀前半から3世紀前葉にかけてのものであることを考え、この段階の詳細な年代観を確立することができた。さらに、副葬陶器に共伴する五銖銭の型式変化や粗悪化は、陶器編年に対応しており、陶器編年の正しさを保証するものとなった。さらにマントン1A号墓を中心とした青銅容器の年代観も陶器編年と矛盾するものではなかった。こうしたベトナム漢墓の編年の確立は、漢の郡治が作られて以降にみられる在地文化の変容や漢の支配構造など考える上での基礎的な年代軸となるであろう。

さて、灰釉陶壺にみられるベトナム北部から南中国までの共通性、さらには青銅容器や青銅鏡におけるこうした地域での共通性は、これらの地域を共通とした流通圏あるいは共通のイデオロギーが存在したことを示している。さらにベトナム漢墓から出土する青銅容器や灰釉陶は、ベトナム北部において独自の生産体系が構築されていた可能性が高い。また、墓葬構造の変遷で認められたように、2世紀中葉から3世紀にかけて認められる単券頂多室墓と後藏室の組み合わせはベトナム北部で在地的に発達したものである。2世紀後葉にはベトナム北部交趾郡・九真郡・合浦郡・南海郡を中心とした土爨政権が漢王朝から独立して成立し、その版図を南中国(嶺南地方)にまで広げている。土爨政権の成立は、ベトナム北部から南中国の共通した文化圏と、墓室構造や副葬陶器にみられるベトナム固有の地域性の確立が、その背景にあると考えられる。